

茅風



Breeze from the field of thatch-grass

2007年7月22日  
森林塾青水  
事務局便り  
茅風通信 22号



2007年6月9日

芦ノ田峠にて

特報「みどりの日」自然環境功労者環境大臣賞受賞  
2007年4月下旬～6月の活動報告(事務局) …… 1

特集：野焼き

- 火消し少年の思い出(松井博義)…………… 2
- 古き世の火色ぞ動く野焼きかな(関根静吾)…………… 3
- 野焼き 最高!(大前清祿)…………… 3
- 野焼きに参加して 新川 聖…………… 4
- 森林塾青水定期活動に参加して(林 和彦)…………… 5
- 越冬蝶エルタテハに出会う(多葉田五男)…………… 5
- 特別寄稿 茅場や草地を復活することの意義  
(岩手大学准教授山本信次)…………… 6

特集：古道「芦ノ田峠」再生

- 芦ノ田峠の下見(海老沢秀夫)…………… 7
- 「芦ノ田峠」古道復活なる(小野 丞)…………… 8
- 楽しかった、また行きたい(吉田亮太)…………… 8
- 何という充実感!(中村佳子)…………… 8
- ただ歩くのとは違った感動(原田通宣)…………… 9
- タカの仲間サシバを観察(多葉田五男)…………… 9
- お礼と体験記を兼ねて(小野塚修・さくら)…………… 10
- 第4回講座「コモンズ村・ふじわら」のご案内…………… 11
- 編集後記～塾長のつづやき…………… 11

特報「みどりの日」自然環境功労者環境大臣賞受賞

事務局

今年度、森林塾青水は、自然環境の保全に関して顕著な功績があった者又は団体の功績を讃える、「自然環境功労者環境大臣賞」を受賞し、4月25日に新宿御苑において表彰式がおこなわれました。各部門計41件の個人・団体の中の保全活動部門(貴重な自然や身近な自然などの保全のため特色ある活動を推進した者等)19件の中に選ばれました。「都市部を中心としたボランティア組織。地元住民や行政と連携し、先人や古老の知恵に学びながら里山の生態系や景観の保全、奥山集落全体のエコミュージアム化による活性化等に尽力。」していると評価・紹介されました。



4月～6月の活動報告

事務局

4月14日～15日;今年度第1回講座「コモンズ村ふじわら - 山の口開けと野焼き -」

- 鈴木・みなかみ町長ならびに熊木・藤原区長のあと、(雲越)萬枝さんの指揮により、恒例の「山の口開け」行事とご当地流「野焼き」の方法と注意事項の伝授。
- 午後2時半、待望の火入れ開始。参加者は地元ならびに町役場から20余名、当塾会員・会友30余名、多数の写真愛好家や見学者と報道関係者を含め、計100余人。
- 野焼きの様子は14日(土)夜のNHK「首都圏ニュース」にて報道された由。参加者の感想、レポートなど特集をご参照ください。

4月25日;「みどりの日」自然環境功労者・環境大臣賞の授賞式。塾を代表して浅川、清水が出席。詳細は上記「特報」ご参照ください。

5月12日～13日;第2回講座「コモンズ村ふじわら - 古道・芦ノ田峠の再生(1)」

- 12日は再生作業のための下見。(林)謹一さんはじめ地元・青木沢集落の皆さんが峠道の地図や武尊川を渡るための仮橋を事前にご用意いただくなど、大変なお力添えをいただき全員無事故かつ楽しく下見ができた。
- 翌13日は藤原案内人クラブの皆さんと雨呼び山遊歩道の道普請作業のお手伝い。頂上近くの展望台からの見晴らしもすっかりよくなった。

- 今回の参加者は塾生・会友 12 名に加え川場村から武尊山 100 キロトレール構想を推進する岸さんも。地元からは青木沢の謹一さん、亨(とおる)さん、藤原案内人クラブの親男さん(会長)、惣一郎さん、行男さん、高田さん、藤原ガイドマップ作りに多大のご協力をいただいた好一さん。皆さんありがとうございました。
- 5月19日;麗澤中学の樹木観察会。** 中学 1 年生 100 余名に対し日本大学(教職課程)の学生さん 24 名と当塾スタッフ 8 名(湯本、高野、富田、岡田、川端、三好、太田、佐山)で対応。学生リーダーをはじめ皆さん、よくやりましたね。ご苦労様でした。
- 5月19日~20日;** NPO 法人知的ネットとの共同企画「藤原の森を歩こう」の参加者 15 名をご案内して早春の藤原へ。湯の小屋の旧・サンワみどり基金「水源の森」、宝台樹の「自然花苑」、武尊山・ぶなの森、明川集落、そして最後に上ノ原「入会の森」などを 2 日間かけてゆっくり散策。葉留日野山荘の山菜料理と美人の湯も含めたっぷり楽しんでいただいた。ご案内の労をいただいた高橋泉さん、親男さん、義一さん、ありがとうございました。(清水)
- 5月24日;** 原顧問、滑志田顧問並びに笹岡顧問をお招きして環境大臣賞受賞の報告、お礼と今後とも引き続きのご指導をお願い。(浅川、海老沢、川端、高野、清水)
- 6月9日~10日;第3回「講座 commons 村ふじわらー古道・芦ノ田峠の再生(2) - 」**
- 今回は、5 月の下見を踏まえての再生作業。朝方からのあいにくの小雨模様の中、亨さんと親男さんが武尊川に頑丈な金属製の仮橋をかけてくれる。また、謹一さんのお計らいで、沢へ下りる梯子(はしご)もご用意いただいた。お陰さまで、雨後の増水で荒波が足元すれすれに牙をむく仮橋を全員無事に渡り終える！ 6 歳のさくらちゃんを背負っての小野塚さん、もうすぐ 70 歳に手の届く原田さん、実は見えてドキドキハラハラでしたがホントよかったですね。
- 参加は塾生・会友 16 名に朝霞西高校のワングル部員 7 名・顧問 2 名の皆さんが加わり計 25 名。謹一さん、亨さん、正之さん、親男さん、そしてご案内役の惣一郎さん、皆さん本当にありがとうございました。参加者の感想、レポートなど特集 をご参照下さい。
- 6月12日;** (財)森林文化協会・藤原常務理事に環境大臣賞受賞など近況のご報告とお礼、あわせて今後のご指導ご協力をお願い。(海老沢、清水)
- 6月17日;** 文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議の 5 周年記念シンポジウム「もり・こころ・わざ」に参加。足本事務局長や「森林を楽しむ会」のスタッフの皆さんとも交流、再会を約す。(清水)
- 6月20日~21日;** 群馬県の行政機関、大学などへ当塾の活動報告と協力依頼のキャラバン。浅川、川端、清水でみなかみ町役場、利根沼田県民局、世田谷川場ふるさと公社、群馬県環境森林局・緑づくり推進センター、前橋工科大学ならびに高崎経済大学を歴訪し、特に 10 月、11 月の茅刈り作業への参加者募集につき協力をお願いした。
- 5月9日、6月6日;幹事会開催。** 6 月度より、新たに稲さんをご参加、フレッシュな感覚でのご発言をいただく。

## 特集 : 野 焼 き

### 火消し少年の思い出

/松井博義

いよいよ野焼き舞台が始まる！！

私は肩に水の入ったジェットシューターを背負い込み、ホースを持った消化班だ。もちろん生まれてはじめての経験で、どんなことになるのか想像も付かず、余裕顔でいるものの内心はドキドキものだ。

それというのも、小さい頃・・・春先の田舎の土手で 4 - 5 人の近所の仲間と野火をしたことを思い起こしていた。周りには家は無く枯れた雑草が生えているだけ、風も無く、前は川。安心してマッチで火をつけた。とたんに風が出てすごい勢いで火が走り出していた！あわてて足で踏んで消そうとしたがとても間に合わず、必死の思いで上着を脱いではい、ついにはごろごろと火の上に転がって消していた。苦い思い出だ・・・

いよいよ始まった。あっちこっちで火がつけられた。火と風と煙の競演だ！！主役が移動するたびに巻き起こる、ぱちぱち、ぱちぱちという歓迎の拍手の音、熱さとなつかしい煙の臭い。夢中になって完全に火消し

少年になりきっていた。焼けたあとの黒い斜面を見ると都会では味わえない達成感があった。寝る前に“火遊びするとおねしょするよ”と教えてくれた田舎のお袋を思い出した。おまじないをして床に入った。今日は本当に楽しかった。





雨もあがり絶好の「野焼き」日和だ。楽しみにしていただけに胸の高まりを感じる。まずは、「山の口開け」儀式。地元の長老の音頭で「二礼二拍一礼」。皆で山の神様に今年一年の恵みと安全を祈った。

いよいよ野焼きの開始である。杉の棒の先に布を巻き、灯油を沁みこませたところに火をつけ枯れたススキの数箇所点火する。たちまちあちこちでパチパチ、パチパチと音をたて、周りに移ってゆく。前日までの雨のせいもあり、やや湿りがちとは言え、徐々に火の勢いが増す。熱さとなつかしい煙の臭い。火が風を呼ぶのか、山の気候のせいなのか火の向きがしょっちゅう変わる。周囲の残雪を防火帯としているがそれでも目が離せない。我々は消火隊として水タンクを背負ってあちこちと夢中になって消火に走り回った。壮観であったのは炎が列になって傾斜面を山手に向かって上昇してゆく姿である。誠に、圧巻であった。約2時間余りの野焼きであったがあっという間に時間が経った感がある。辺りが静寂な時を迎え、真黒くなった平原に白樺の木が数本立っていて、黒と白のコントラストが印象に残った。黒と白のコントラストが印象に残った。

今回の野焼きは40年振りに復活し、4年目と聞いている。昔の野焼きはもっと広大な平原で雄大に行われてきたのだろう。どのようなスペクタクルが見られたのだろうかと遠い昔に思いを巡らせ、先哲の知恵に思わず敬服してしまう。将に、「古き世の火色ぞ動く野焼きかな」(蛇笏)の心境である。

みなかみ町藤原の「野焼き」は春の風物誌として年々有名になってきている。このような行事に参加し、貴重な体験をさせて頂き有難うございました。

### 野焼き 最高！ / 大前清祿

昨年の野焼きは天候の関係で日時に変更があり、参加できなくて冬のカンジキづくり以来、1年半ぶりの参加だ。前回は2.5メートルの雪のため「入会の森」の看板も全く見えなかったけれど、今年は雪も少なく看板にも合言葉の「飲水思源」の表示にも初めてお目にかかった。

雲越さんの野焼き作業指導・説明のあと、山の口明

け行事を行い、フィールドに残した雪の土手の隙間部分を焼いて前準備をし、上の部分から火をつけて行く。昨夜少し降った雨でちょうどいい燃え具合との事だが時々大きく燃え上がり杉の枝でたたいて(押えて)消す。森にはたくさんの虫や小動物がおり、飛び出してくるのかと思ったがまだ活動の時期ではないようだ。

新聞社のカメラマンやNHKのテレビが撮影に入っている。新聞社の人や地元の人に「焼いた後はワラビなんかが出るんでしょうね。」と聞いている。「焼いた灰が肥料になるのでしょうか太いしっかりしたいい色のワラビが出ます。」と答えていた。私なら「灰を被ったためでしょうかあく抜きしなくてもいいワラビがたくさん出ます。」と答えてやるのにとシャレの虫が頭をもたげる。

火祭りの多い紀州で育ち縄文人大好きの私は火を見ていると男の血がさわぐ。炎はメラメラとゆれながら茶色の草原を真っ黒に変えて行く。2ヘクタールとの事だがもっと多く焼いたように思った。

終ってひとこと「クローしました。」

夕食のあと交流会があり地元や町役場の人も参加、来年の野焼きの他行事についての話し合いが行われた。のち、懇親会で飲みながら色々話が盛り上がった。色々な特技や知識を持った方がたくさんおられ楽しかった。風呂でも一緒だった町田さんは数少ない茅葺の職人さんをまとめられている社長さん。人柄の良さが顔だけでなく身体全体に表れた楽しい人で「ススキの株立ち」について質問したら、株立ちしたススキは根が曲がって捨てる部分があり茅材としてはやや不適との事。フィールドのススキがなぜ株立ちしないのか説明してくれた様にも思うけど酔っ払っていてよく覚えていない。

フィールドの説明をされた海老沢さんは森の事にくわしいのは当然だが、珍しい姓の多葉田さんも虫や蝶や鳥についてくわしくカメラも達人のようだ。私はビールを野蒜(のびる)のつまみで飲みながら駄句をひとつ。(野蒜はおいしいけど唯一の欠点あり。食べたあと屁がくさい。)

野蒜の屁 まともにかげば のびるべー  
(最有臭賞)





翌日、朝早くから多葉田さんはカメラを持って鳥を見に行かれた。アカゲラのドラミングをきいたとか。山菜採りが好きな内野さんはフキノトウをたくさんとってきていた。朝食後、入会の森に移動シタニウツギ等の樹木の除伐をした。民宿の場所と高さはそう変わらないけれど、雪をかぶった向かいの山がくっきり見える。谷川岳、武尊山、朝日岳、一度は登ってみたい山だ。

作業終了後、森の散策をした。岩手大学の山本先生が色々説明してくれた。この先生、本を読んだだけの知識ではなく、現場のフィールドで活動されているため説得力があった。

うさぎの2度目のフンの色が違うのは水分の関係  
このサルのうんこは標準よりやや太め  
ヒミズとモグラは穴の深さを違えて住み分けている。  
(そう言えばヒミズではないけれどシミズという塾長  
モグラは東京の地下鉄という穴を使っていると聞いた)

私がテンとイタチのウンコはテンが10ミリ以上(だからテン)それ以下はイタチですねと聞いたら、そういう分け方もありますが、イタチの方がやや肉食でウンコにカルシウムが多いと言われ驚いた。なんでそんなことわかるのか「このおっさんきっとウンコの味見をしたな!」と確信した。

野焼きの事が次の日の上毛新聞に出た。写真に小さく私が出ていて松井さんからいただいた。いい記念になった。

千葉に帰ったらぜひやってみようと思った。自慢できることではないけれど、「レベルの事を言わずアウトドアに限った遊びについてその数だけならちょっと負けないよ」と思っている私に、友人の半数以上は会った時「今なにしている!」と聞く。この時私はさりげなくこう言いたい。「そうだねー最近やって面白かったのはジジイの火遊びかな。やみつきになりそう。」  
「……」

では又、お会いしましょう。お世話になりました。

私は、今回の野焼きに参加させていただいて、たくさんの「色」を感じました。

白色(雪)の混じる春山

山が母であるならば、山の懷に抱かれて遊び、畏れ、敬う我々は稚児のような存在でしょうか?

金色の茅野

雪の下で一冬を過ごした茅も良いですが、風に揺れる茅も見てみたくくなりました。

疾く、そして無軌道なオレンジ色の炎

無軌道な炎が金色の茅野をたちまち黒く染めあげていくのに心を奪われ、気がつけば私を取り囲んでいた炎。その時、俺の背中の中相棒(ジェットシューター)が火を(水を)吹いた(この一文はハードボイルド調でお読み下さい)。少し大きな炎は、私に多くのことを忘れさせ、そして何かを感じさせてくれる存在のようでした。

緑色の若々しさ

月並みですが、茅の間から覗くふきのとうの緑は、やっと始まる春を期待させるようなワクワク感を帯びた色でした。

澄んだ色の水

うまい。ペットボトルを持って行って大正解でした。水道の水とコンビニで買う水しか知らない人にも教えてあげたい。

はずかしながら、ガラにもなく唄を詠んでみましたので、聞いてください。

橙の<sup>ほむら</sup>炎茅野を染めにけり

頬の熱さに 我也染まらん

残雪の 野山に<sup>は</sup>爆ぜる 草木かな

みな声爆ぜる 山の口開け

透明な 水のうまさに 驚きて

飲み過ぐ体に 山は厳しく



## 森林塾青水定期活動に参加して /林 和彦

13日(金)業務終了後、新川主任と私の2名にて、戸田市経由にて群馬県みなかみ町の私の実家に向かう。翌、14日(土)10時、上越新幹線・上毛高原駅に集合、清水塾長以下数十名の方々と車でみなかみ町・藤原地区のフィールドに向かう。折しも東京では葉桜になってしまった桜が満開。改めて気温の異なりを肌で感じる。



朝、起床してから何となく肌寒さを感じており、これは、前夜、某主任の寝言 歯軋り 鼾にて夜中2回も起こされたせいだと思っていたが、どうもそればかりではなさそうだ。

フィールド到着後、改めて360度見わたしてみるが、残雪の多さに遅い春を感じる。それでも例年の1/5もないほど、降雪は少なかったようだ。

時折、今にも曇になりそうな冷たい雨が吹きつけるが、空は数時間後の晴天を約束するかのように、早い雲の流れで、ここがまぎれもなく、上越国境の山岳地帯であることを教えてくれる。

川端副塾長?の集合がかかり、簡単なメンバー紹介、本日の予定等が告げられ、いよいよ、口開式となる。実は、私はこの開山式を楽しみにしてたのだ。山の神に、参加者全員で今日を迎えられた報告と、本シーズンの安全を祈願して、厳かな雰囲気の中、無事終了する。

しかし、今日は参加者が多い。50名以上ではないか。となりの集団からは、懐かしい群馬弁が聞こえてくる。そんな事ねっぺさー、言ったべやー、そうだねー、あー何という素敵なイントネーション。汚い語尾。自分がまだ、素朴で若かった頃、何のためらいもなく使っていたこの言葉、大学生活で上京してから、友人達に馬鹿にされるので、一生懸命、共通語を習得した自分が思い出される。

地元の方の注意事項を聞いて、さあ！いよいよ待望の野焼きのスタートだ。少々風が強いので、延焼には十分注意しなければならない。どこから火を付け、どこまで燃やすか、また火はどう消すのか？全てルール(山の掟?)があるのです。パチッパチッと音をたて、真っ赤な炎が立ち上がると歓声とともに物凄い熱さが、風向き一つでこちらに向かって来たら、即、逃げないと。オッ！俺の横を走りすぎるのは猪か？おっ！失礼、新川君ではないか。彼は重い水袋を背中にかついで、

火消し役をこなしている。結構身のこなしが軽いではないか？昼飯食った後もその調子でたのむよ！

昼食後、再開した作業は、数時間の後、ほぼ全域の野焼きが完了。炎と煙と、所々にある残雪に足をとられながらも、稜線を上に下に(実は下に行くほうが圧倒的に多かった)歩きまわり、煤だらけになりながらも、楽しく終了することができました。

最後に、日帰り組の紹介があり、塾長より紹介していただき、自分の故郷にこんな素晴らしい取組が進展している事を嬉しく思います。とちいーと生意気な？挨拶をさせていただきました。前回の報告でも書きましたが、ほんと、楽しく勉強になる。先人の知恵というのは、すごい！

今度は、自分の息子もつれて参加しようかな！学校でも教えてくれない本当の勉強が教えてあげられそうです。ましてこんな貴重な体験は中々できないだろうな。塾長をはじめメンバーの皆さん、お世話になりました。

## 越冬蝶エルタテハに会う /多葉田五男

4月14、15日 久しぶりでコンモンズ村・藤原のイベントに参加、懐かしい会員の方々に会い 山の口明けセレモニー、野焼き、民宿での語らい、樹木の除伐、フィールド散策等々 奥里山の早春を楽しんだ。

藤原のいきもの達が本格的に目覚めるのは5月だが、上ノ原で越冬したエルタテハが春の陽気に誘われて飛び始めるのを目撃した。又、数種の野鳥を新たに観察するなど 藤原の自然の豊かさを改めて認識したので ここに記録しておきたい。

### 蝶 エルタテハ(写真添付)

15日9時頃 上の原フィールドに到着、早速 ゲート広場からゴルフ場管理道方向に歩いていくと残雪の中、蝶が一頭飛んでいる。ダケカンバの幹にしばし止まったのでなんとか写真が撮れたが 直ぐにゴルフ場作業小屋の方に飛んで行ってしまった。最初、飛んでいるときはアカタテハと思い、近づいてからは一昨年7月フィールドで観察したヒオドシチョウだと思った。しかし 帰宅して写真を良く見て図鑑で調べた結果エルタテハと判明、初めて見る蝶だったのでうれしかった。エルタテハは代表的な山地の蝶の1種であり成虫で越冬する。最近では少なくなっており群馬県レッドブックの絶滅危惧種2類に指定されている。この蝶がいつまでも藤原の山里に生息できるよう祈りたい。



## 野鳥 マヒワ(写真添付)

14日昼食時、上ノ原ゲート広場道路脇のヤマハノキに10羽くらいのマヒワが飛んできて盛んに丸い実を啄んでいた。スズメより小さくメジロよりやや大きい可愛らしい冬鳥で雄の顔と胸部が黄色いのが特徴。北の国に旅立つ日が近い。



## 野鳥 アトリ

15日早朝5時30分頃 民宿「本家」付近の上空を30羽くらいの群れが旋回、近くの林の高い木に止まった。望遠レンズで撮影し 確認したところアトリであることがわかった。スズメくらいの大きさの冬鳥で尾は深い凹尾。藤原で初めて観察した。

## その他の野鳥

14日14時頃 上ノ原ゲート広場 ホオジロ  
17時頃 民宿「本家」付近 ホオジロ(7)、ニューナイスズメ、ムクドリ、カワラヒワ、キセキレイ  
15日5時～ 民宿「本家」付近 ホオジロ、キセキレイ、スズメ、ニューナイスズメ、キジバト、  
6時頃 アオジ、ムクドリ、カワラヒワ、トビ、アカゲラ(ドラミング)

### 特別寄稿 茅場や草地を復活することの意義

/岩手大学准教授山本信次

岩手大学の山本信次先生(農学部准教授・林学博士)が当塾の活動に関心をもたれ、はるばる岩手から野焼きに参加されました。ご専門(林学・森林工学)の立場から参加された背景・動機と激励のお言葉をお寄せいただきました。(事務局)

## 1.はじめに

縁あって4月14日・15日に開催された「野焼き」に参加させていただきました。大変に心躍る、また興味深い体験をさせていただきました。私は「森林」を専門とする研究者ではありますが、何ゆえ「茅場」の維持・復元に関わる活動に興味を持ったのか、「茅場」や「草地」を維持・復元することの意味について少々、文章を書かせていただくことといたしました。

2.日本は「緑の国」ではあっても森林の国ではなかった!

現在の日本の「林野」面積は2515万haです。よく、この数字を持って、「日本は国土の7割を森林が占め

る国」と言ったりもしますが、よくみていただくと、冒頭の数字は「森林」面積ではなく、「林野」面積となっています。確かに現状の詳細をみると、おそらく「野」であろう、森林ではない「その他」に分類される面積は37万ha、1.5%と微々たるものです。別な統計では原野27万ha・採草放牧地7万ha=日本の草原面積34万haであり国土に占める草地の面積は1%に過ぎません。これをみれば日本は森林の国と言ってよいでしょう。

しかしこれは現状であって、遠い昔からずっとそうだったのでしょうか?

1887年(明治17年)の原野面積は1320万haとされています(統計上の不備もあり確実とはいえませんが)。この当時の「林野」面積も今とあまり変わらない2500万haでしたので、「林野」の半分は「野」だったこととなります。国土面積から考えれば1/3が原野・草地だったということとなります。その後、20世紀初頭においても500万ha程度の草地が存在したと考えられています。

現代はひょつとすると、この列島に人が住み始めて最も森林の多い時代かもしれないのです。

3.なぜ、そんなにも草原が必要だったのか?

「あとは野となれ、山となれ」と言う言葉がありますが、温暖湿潤な日本の気候であれば空き地は、放っておけば野(草地)になり、さらに森林になってしまいます。前節にみたように 草地が多いということは、野焼きや刈り取りなどの人為を通じて、植生遷移を止めて、まさに人為的に草地のままにしておいたということになります。それでは何に使っていたのでしょうか?

草地の種類は以下のように分けられます。

草山……刈敷(田んぼに草や芝をすきこんで肥料にすること)・役畜の飼料を取るところ

柴山……刈敷・燃料などをとるところ

芝山……放牧地

茅山……屋根材をとるところ

この他、いわゆる背の高い木のない「小松山」と言われたところなどもありました。これらをみるとまさに、農山村における生産と生活に必要な資材を採取するところが「草地」であったわけです。

近代化以前の草地の必要面積を推計した方がおり、それを抜粋すると農家一戸に田畑0.5haと役畜としての牛が一頭いた場合草地2ha~5haが必要だったとされています。これには屋根材や燃料(この場合は一時的な草地としての伐採された雑木林でしょうが)は含まれていませんので、これよりも多くの草地が必要だったことは明らかです。

4.何故、草原はなくなったのか、その弊害とは?

戦後の急速な近代化が化学肥料の普及や化石燃料への転換、屋根材の変化などを引き起こし、草地は森林化され、あるいは開発転用されていきました。現在レッドデータブックに記載されている絶滅が危惧される植物の7割は草原性とも言われています。開発・転用が自然環境に与えるインパクトは言うまでもないとして、

森林化も地域の自然環境を確実に変えています。私たちは今まで「森林化＝善」と捉えることが多くはなかったでしょうか？森林さえあれば、自然環境の問題はすべて解決するとする過度の思い込みを持っていなかったでしょうか？無論、森林は大事なのですが、草地にも草地にしかなしえない、自然環境的にも人間社会を維持するためにも大切な役割があったことを忘れていたような気がします。森林研究者の一人として自戒を込めてそう思います。

#### 5. ムラの自然や景観を保全するには

先に述べたように草地は農的な人間の生活の必要から生まれ、周囲の生き物もそれに適応して共生関係を築いてきました。現在の農山村を取り巻く現状では草地が自然に復活することはありえないでしょう。とはいえ草地の復活を「環境のため」だけに行うのは不可能でしょうし、またその役割を農産の住民の皆さんに押し付けるのは無責任の極みです。

草地を復元するには「ムラの暮らしを自然に依拠したものに近づけていくこと」が必要でしょう。そのためには「マチの人には何が出来るか」を考えてみなくてはなりません。農山村と都市の住民がともに汗を流す交流の中から、その答えが見えてくるのではないかと私は考えています。その意味でみなかみ町における活動は、大変意義あるものとして勉強させていただくために参加させていただきました。今後ともよろしくお願いたします。

### 特集：古道「芦ノ田峠」再生

#### 第2回「ゴッス」芦ノ田峠の下見 / 海老沢秀夫

5月12日

昨年の青木沢峠に続いて、今年は芦ノ田峠(青木沢集落～平出集落)の旧道再生です。今回はその下見。青木沢の林亨さんや藤原案内人クラブのみなさんと歩きました。



青木沢の林翁(勤一さん)が、過去の記憶をもとに「芦ノ田古道」の「古地図」(写真)を準備しておいてくれました。それによると、「大正末から昭和10年ごろまで」は、芦ノ田古道周辺の山(幕掛山～高松山～芦ノ田山)ではさかんに炭焼きがおこなわれていたこと、焼い

た炭は山の尾根づたいに単線の「鉄索」を張って「1日300俵」もの量を滑車で運んだこと、芦ノ田峠の名前のもとになった「芦ノ田」という湿地には戦時中、疎開の人が住んでいたことなど、興味深い情報が書いてあります。



実際の「芦ノ田古道」はどうだったかという、青木沢峠の古道同様、たいへん魅力的な古道でした。デフォルメされた十字架模様が刻まれた「キリシタン墓標」や石像などは、この道のミステリアスな物語をイメージさせます。道沿いの樹林も変化にとんですばらしいものでした。すらりとしたブナの林にもわくわくさせられます。「芦ノ田」の湿地には、氷河期の生き残り植物とされるミツガシワがありました。平出へ出たところで目に入ってくる藤原湖も、ダム湖とはいえないものです。

芦ノ田の道自体は、少し手間をかければすぐにでも歩ける道になりそうです。ただひとつの難関は、青木沢集落からすぐのところの武尊川です。橋がありません。川幅が広く水量も多い難所です。今回の下見では、林さんたちが厚い板を渡しておいてくれたのですが、足をすべらせたなら怪我ではすまないかもしれません。今後の宿題になりそうです。

5月13日

藤原案内人クラブのみなさんと、雨呼山のハイキング道の手入れをしました。入り口の鳥居のペンキ塗りや道中の刈り払い、頂上の整備などです。大部分は案内人クラブのみなさんが仕事をして、私たちはほんの少し手伝ったということでしょうか。でも、地元の案内人クラブが作ったコースを、森林塾のメンバーと一緒に整備するというのは初めてのこと。お互いの関係がいっそう深まったような気がします。

少しだけ、上ノ原のフィールドも見に行きました。4月に野焼きしたあとには、ススキが勢いよく芽吹いていました。センボンヤリ(ムラサキタンポポ)という小さなキク科の植物が、花を咲かせていました。これまでリストになかったものなので、私たちにとっては「新発見」です。これも野焼きのおかげでよけいなものがなくなったため、目に入ったのでしょう。この植物、秋にも別のかたちの花を咲かせます。気をつけて見ていくことにしましょう。



前回の5月の調査をふまえ今回は整備作業を行いました。先月の調査時の状況は、古道の道方はしっかり残っていますが、笹や小木が生えており、このままでは数年で復活させるのは不可能な状態になりそうでしたし、平出集落側では倒木が多数あり、道がふさがれていました。ただ今の状況なら我々の力で整備可能なのではとんでいたため、先月からとても楽しみにしていました。

しかし、当日はあいにくの雨…今回2日間の作業だけでは終わらないかな…と初めは思っていました。おまけに私の使っていた草刈り機は作業途中で故障してしまう始末…。

ところが、草刈り機を使うのは初めてのはずの K さんが先頭で鬼気迫る大活躍をみせたり、今回初参加となる高校生たちの疲れを知らない作業のおかげで、1日目で3分の2以上の距離の作業を終了することができました。2日目の作業で古道全てを復活させられる期待が高まりました。ただし、残りの3分の1は急勾配で連日の雨によりかなり足下が悪く、おまけに倒木が多数あり、ノコギリで対応してはとてもしんどい状況でした。そこで、私がチェーンソーを使って倒木除去をすれば間に合うのではと思い、あまり使ったことがなく作業になるか不安はありましたが倒木除去を担当しました。

結果は…最後の倒木の除去途中でチェーンソーのオイル切れで作業を断念しましたが、その他の整備は見事完了しました。

水上町から帰り一夜明けてから、この感想文を書き始めました。まだ、心地良い疲労感が体に残っています。水を満載したジェットシューターは予想以上に重く、山の斜面の歩き方のごち無さも加わってぐったりと疲れ、土曜日に家に着き風呂に入ると、10分もしないうちに眠ってしまいました。連日の作業でかなり疲れましたが、目標を達成できた充実感のおかげで心地よい疲労感を味わえました。

今回の古道復活作業が完了できたのは、高校生たちの大活躍なしには考えられなかったと思います。高校生たちには感謝・感謝です！

今後、青木沢集落側にある沢に吊り橋を作る計画ですが、その作業にも是非参加したいです。実際、橋が完成しないと本当の意味での芦ノ田峠古道復活ではないので…

### 楽しかった、また行きたい

朝霞西高校ワンダーフォーゲル部部长 3年吉田亮太

今まで僕たちは、少しでも早く山頂に登ることを考えていました。ですが、森林塾の皆様のような方々が、山道の復旧作業をして下さるおかげで、僕たちが安全に山道を歩くことができるのだと感じました。

部員たちの中には鎌を使うのは初めてという人たちが何人かいました。それを聞いて僕は「手切るんじゃ…」と心配していました。ですが心配していたのは裏腹に、一日目は人が一人しか出なくて心の中では安心していました。

その日の晩、食事のあとに塾生の皆さんとの交流会を開いていただき、いろいろなお話を聞くことができるとても楽しかったです。

二日目は朝から雨が降ってしまい、とても作業がしにくい中で、一番恐れていた自分が指を切るという、後輩に顔向けできないようなことをしてしまい、そのせいで二日目は数分作業をして終わってしまいました。

そして午後に行われた入会の森での植物の観察は、今まで見たことのない草木や景色そして美味しい空気、どれもこれもが新鮮でした。また最後に飲んだ湧き水は、なんとなくさらさらして柔らかい感じがするとても飲みやすい水でした。

学校に帰ってきた後も、部員たちから「楽しかった」や「また行きたい」との感想が出ました。来年の野焼きの際には是非とも後輩をお願いします。本当に有り難うございました。



### 何という充実感！

朝霞西高校ワンダーフォーゲル部顧問中村佳子

6月は「昔の道の整備」と聞いて、真っ先に生徒の顔が浮かんだ。5月の大会と7月の夏山のための6月山行をどこにしようかと迷っていた時だった。一昔前なら夏山のためのボッカ訓練だろうが、今の若者にそんな大変なことをさせたら逃げられてしまう。それなら、い



つもは漫然と人が作った道を歩くよりは、自ら道をつけるという作業を通して、その大変さを体験してもらうことが今後の活動にプラスになると判断し、打診してみた。幸い皆様に快く受け入れていただけて参加できることとなった。感謝。

当日はあいにくの雨模様。到着したときには土砂降り、立教の山小舎に荷物も入れられないほど。だんだん小降りになったものの、雨の中の昼食は厳しい。その日のお昼を山小舎でとれたのはラッキーだった。午後、翌日の午前と作業中、生徒たちは生き生きしていたように思う。多分カマで草を刈ったり、ノコで木を切るのはみんな初めてだったと思う。でもやはり若さの勝利だ。雨具を着て雨の中を作業するのを厭わない。重い荷物を背負って雨の中、山を歩くよりはましなのか。とても終わらないと思われていた峠道が貫通したのだ。何という充実感！

しかし反省点もある。けが人が二人出たが、それも軍手をきちんとしていれば避けられたものと、足場の悪いところを歩くときに、きちんと刃物を鞘に収めていれば、避けられるものだった。事故は起こるべくして起きるのだ。肝に銘じたい。

2日目の午後森を散策できたことも良かった。普段はあんなにゆったり森を歩いたりしないので、もう少し時間があるともっと良かったのだが。立教の山小舎に泊まれたのも良かった。電気もガスも水道もある。雨に濡れることもない。夕飯の鍋、朝食のお好み焼き、昼食の冷やし中華と生徒たちは楽しんで作っていた。雨の季節にテント泊は正直つらい。いたれりつくせりの今回の山行だった。

また機会がありましたらよろしく願います。



### ただ歩くのとは違った感動

/原田通宣

川端さんに誘われて参加しました、原田です。最初誘われたときに色々説明されましたがどうしても森林塾と言うものが理解できませんでした、実は今でも仕組みや目的がわかっていません、しかしながら一泊二日を楽しく過ごすことが出来、新しい発見や感動がたくさんありましたので、理屈は後回しにして、感想を書いて見ました。

私は都会住まいで自然に憧れ長らく里山歩きを続

け、関東近辺の里山や田園の中をもっぱら歩いてきました。それなりに自然を見たり聞いたりしておりましたが、今回一箇所で行動し観察することが、ただ歩くのとは違った感動のあることを、知りました。

感動し面白く思った事柄を羅列してみます。上ノ原入会の森、唯の草原も注意して観察するときれいな草花や昆虫類が多く見かけられました、それぞれに興味のある人にはたまらない環境なのだろうと思われました。水汲み場でこの水が近辺の人たちの飲料水で塩素消毒を義務づけられているという話は、なるほどと感心しました。「たにうつぎ」が草地では侵略者扱いを受けていることが目新しく感じられました。

青木沢の仮橋と崖のぼり、雨で水量の増した沢は僅かな量でも恐怖を覚えました。続く崖のぼりもいきなりであった事もあり恐々と上っていると脇を中学生が猛烈な勢いで抜いてゆき、若さに脱帽。

芦ノ田古道の再生、予想したよりきれいな路で地元の人や先輩が整備されたのだろうと苦労がしのばれます。ここでは二つの発見、蔦漆、良く見かける蔦が恐ろしい漆だとは知らなかった。鎌の使い方、草を刈るときは横に払う鎌も多少太めの雑木を伐採するときには歯を横にして叩きつけるとよく切れた。雨の中合を着ての作業が珍しく面白かった。

今回の参加を機会にお仲間に加えていただけたらと思い早速申し込みをしました、これからも宜しくお願いいたします。

追伸 山菜尽くしの夕食・朝食・昼食がとても新鮮に感じられました。

### タカの仲間サシバを観察

/多葉田五男

6月9日(土)、10日(日)「コモンズ村・ふじわら」の活動に参加、あいにくの悪天候であったが1日目は旧道「芦ノ田峠」の復旧作業に参加し、2日目は上ノ原「入会の森」の自然探索を楽しんだ。

6月9日(土)

立教山荘での昼食前の短時間を利用し、上ノ原「入会の森」を単独で散策した。雨模様で期待していたチョウ類は飛ばなかったが、ホオジロが姿を見せ、イカル、カッコウ、ツツドリ、ウグイス等の野鳥の声を聞くことが出来、しばし高原の初夏を味わった。

昼食後、青木沢に移動。全員で旧道「芦ノ田峠」の復旧作業を開始した。入り口部の武尊川にかけた仮橋が午前中の大雨のため流されたので、地元の方々が急遽、鉄パイプ製の橋とロープを設置、なんとか全員無事、急流を渡りきることが出来た。

復旧作業は朝霞西高校ワングル部の先生方と部員の奮闘、協力を得て順調に進んだ。道端にはギンリョウソウ、フタリシズカ、フジの花が咲いていた。午後4時頃、芦の田で休憩、参加者全員で記念撮影、午後5時頃に作業を終了した。

6月10日(日)

朝4時30分頃、幸い雨は止んでおり、宿(吉野屋)を出て徒歩で明川に向かった。明川の入り口付近の森からオオルリの囀りが聞こえた。明川の大坪祥一さんのピオトブ付近で上空を大型の鳥が飛び、遠くの大きな木の梢に止まった。しばらくして移動、幸運にもすこし離れた電柱に止まったので少しずつ近づいて写真を撮った。サシバだ。タカ科の猛禽で日本には夏鳥として渡来し、昆虫やヘビ、ネズミなどを食べる。上ノ原でも以前 それらしい姿を見たが、今回初めて証拠写真が撮れ、大きな収穫だった。6時30分頃宿に戻る。



早朝散策時の観察記録

野鳥： ニュウナイスズメ、キセキレイ、ヒヨドリ、(ウグイス)、ハシボソガラス、カケス、(ヤブサメ?)、(オオルリ)、(キビタキ)、ホオジロ、(ホトギス)、サシバ、キジバト、シジュウカラ、ムクドリ、ツバメ、(カッコウ)  
( )は声のみ

植物： サワオグルマ、ヒルムシロ、キュリグサ、フジ

動物： リス?、キツネ?

朝食後のミーティングで 天候不順のため午前中は旧道復旧作業チームと自然探索チームに分かれて活動することに決定、後者のチームの一員として上ノ原「入会の森」を中心に生き物調査を行った。

11時頃 「入会の森」からレストラン「幸新」に移動する途中、道路脇の林からキビタキの美しい囀りが聞こえた。又「幸新」の近くに来て 一時的に晴れ間が出たので、今回期待していたウスバロチョウが姿を見せてくれた。又「幸新」の駐車場では持参したフィールドスコープでニュウナイスズメを皆さんに見ていただいた。

上ノ原「入会の森」の観察記録

野鳥： ホオジロ、(ウグイス)、(カッコウ)、(キビタキ)、ハシボソガラス、( )は声のみ

昆虫： エゾハルゼミ

植物： ギンラン、チゴユリ、タチツボスミレ、スミレ、クルマムグラ、フタリシズカ、ヤマタツナミソウ、タニウツギ

「幸新」付近の観察記録

野鳥： ニュウナイスズメ、キセキレイ

昆虫： ウスバシロチョウ、ヒメウラナミシジミ、モンキチョウ、クロアゲハ?、オオスカシバ?

動物： カナヘビ



お礼と体験記を兼ねて

/小野塚修・さくら

会員の皆さん、先日は大変お世話になりました。私は新潟県十日町市(旧東頸城郡松之山町)の出身です。田舎を離れてから自然が恋しくなり、また環境問題に興味を持つようになりました。子供にも早いうちから自然の大切さ、素晴らしさを教えてあげたいと思い、親子で参加させて頂きました。

当日は朝から曇天。さくら(娘)の気分もまた曇天。実はさくらは人見知り激しく、さらに昨年の夏に参加した幼児向け林間学校での体験がトラウマとなって、初対面の方々との行動がうまく出来ません。行きの新幹線の中でも「大丈夫かな?」「気持ち悪くなってきた」などと不安げでした。

案の定、それも「入会の森」に着いた早々の昼食時にさくらが泣き始めたときには「とほほ...。やっぱり駄目かな?」と思ってしまいました。しかし皆さんに優しく接して頂いたお陰でさくらの緊張も段々解れていきました。

増水した川を渡ったときには私のほうが内心ひやひやしておりましたが、本人はさほど驚いた様子も無く、実際の林道の伐採作業は本当に楽しそうでした。また綺麗な人形草を観察したり、翌日の「入会の森」散策で蝦夷春蟬の抜け殻を多数見つけたときには目を輝かせて喜んでおりました。親子共々皆さんのお陰で本当に良い経験をさせて頂きました。ありがとうございました。

次回は是非母を連れてお世話になりたいと思っております。これからもどうぞ宜しくお願い致します。



## 講座「コモンズ村・ふじわら」2007 ススキ草原は人と生き物の入会地

## 第4回 管理道普請と生き物調べ

森林塾青水では、ススキ草原(茅場)と古道の再生・活用に取り組んでいます。地元、行政、都市住民など、さまざまな人たちの力と知恵を寄せ合って、昔のようないい「茅場」にしたい、歩く道を復活させたい。そんな願いを込めた「コモンズ村・ふじわら」は、今年で4年目に入りました。

今回は、上ノ原の道普請と生き物調べをおこないます。参加者、大募集です。

日程...9月8日(土)～9日(日) / 下記予定表をご参照ください

集合...初日の10時20分、JR上毛高原駅改札口

<上越新幹線> 東京 8:52 上野 8:58 - 大宮 9:18 - 高崎 9:52 - 上毛高原駅 10:14

費用...一般10,000円(1泊2食)、森林塾青水会員9,000円(1泊2食)

宿泊費、夕食、朝食、保険代など含む。初日の昼食は各自持参、2日目の昼食代・交通費は自弁  
宿...ロッジ雪割草

〒379-1721群馬県みなかみ町藤原5536-1 / 電話:0278-75-2217

服装など...長袖、長ズボン、ジャケット、手袋(軍手)など、山歩き、作業に適した服装でお願いします。水筒、雨具も必携です

申込先...森林塾青水事務局=コミュニティデザイン(浅川潔) / 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-6-702 【メール】[asakawa@commonf.net](mailto:asakawa@commonf.net) 【ファクス】03-5474-0847

緊急・当日連絡先...清水英毅携帯(09035752283)川端携帯(080-5415-4351)

## 【1日目】9月8日(土)

時刻	内 容	備 考
10:20	上毛高原駅集合	
11:30	倉庫で道具類準備、上ノ原へ	
12:00	昼食・休憩(弁当は各自ご持参下さい)	
13:00	管理道の普請(全コース)...刈り払い、地ならしなど 上ノ原の生き物調べ...マッピング、写真記録など	
18:00	夕食 交流会～星空ウォッチング	ロッジ「雪割草」

## 【2日目】9月9日(日)

時刻	内 容	場 所
7:00	朝食	ロッジ「雪割草」
9:00	上ノ原ミズナラ林の森林調査...3回目のミズナラ林調査です(毎木調査)	
12:00	昼食	レストラン「幸新」
13:00	予備時間 自由散策	
14:00	解散	
15:19	たにがわ416(上毛高原駅)	

## 編集後記 塾長のつぶやき

野焼き雑感;4月14日(土)、40年ぶりに復活して4年目を迎えた火入れの様子が当夜のNHK「首都圏ニュース」で報道された由。それやこれやで年々、参加者が増え地元・藤原の風物詩になりつつある、とか。でも、我々が目的とする茅場としてのススキ草原の再生や生物多様性の保全・回復については報道もされないし、一般参加者の理解も少ないのでは。風物詩もいいけど、本来の目的や茅葺建造物の屋根材を供給する「文化財の森」づくりという側面も理解して参加する人々が増えてくれると嬉しいのだが。

古道の再生；5月、6月の4日間かけて、藤原案内人クラブや青木沢集落の皆さんの大変なお世話になり、芦ノ田峠越えの古道が開通した。昨年の青木沢峠の道とあわせて4～5km。僅かな距離だが、毎年積み上げていけば「武尊山 100 キロトレール」構想の実現も夢ではない。が、来年は寺山峠越えを、と思う一方、管理が出来るか心配になってくる。歩くこと、出来れば刈り払いしながら皆で歩くのが一番だけど、道の本数が増え距離が伸びれば伸びるほど現実には難しい。

茅場の再生も古道の再生も、よく育った茅や歩きやすくなった道が使われないようなら意味がない。再生活動は手段、目的は茅葺に使われること、自然にふれあい学ぶフィールドとして活用すること、そしてフットパスやセラピーロードとして利用されることにある点を忘れてたくない。

藤原ガイドマップも同様；地元の皆さんのご協力と町役場のご理解のお陰で念願の“観光案内らしくない手作りマップ”が出来た。これは素晴らしい、と多くの方々からお褒めの言葉をいただき編集委員一同、舞茸発見状態になっていた。そんなとき、「でも、藤原へはどうやって行くの？」と問いかけてくれる人がいた。手にとって使っていただき、ガイドを手引きに森の散策を楽しんでいただくのが目的だったはずなのに、どうしたら、使っていただけの配慮が足りなかった。

再生途上の茅場や古道も、そしてマップも使われなければ意味がないことを改めて肝に銘じたい。

「環境大臣賞」雑感；浅川さんと新宿御苑の表彰式会場にいた。受賞されたある団体代表のご老人が「環境大臣賞は途中、目標は総理大臣賞だ」と息巻いておられた。「清水さん、この賞はカネがつかせませんがハクはつかますよ」と言ってくれた影の推薦者・大恩人のMさんのお言葉を思い出していた。地元の皆さん並びに行政と一緒に積み上げてきた活動とその内容が評価されて嬉しかったが、ハクがつくほどの成果はあがっていないと自覚していたし、もし頂いたとしたら少しばかりのホコリ(誇り)かな、など思っていた。仲間の皆さんと一緒に、楽しみながらよい汗をかきながら、カネやハクも悪くはないけど、もっとホコリがつくといいいかな？

Pホテルを某外資が買った話；K社のリストラ策の一環でこの4月に決まった由。Pホテルの敷地は夏はゴルフ場、冬はスキー場そして一部は別荘地であることはどなたもご存知だと思うけど、かつては入会地としての茅場であったことを知る方は少なからう。当塾が町から借り受け管理・利用させてもらっている「上ノ原入会の森」は、その元・茅場200ヘクタール余の過半がK社に買い取られた残りの僅か十分の一、約21ヘクタールにすぎない。

某外資はリゾート地・施設を買ったつもりであって、歴史ある元・入会地を買ったとは夢にも思っていないであろう。せめて、その隣接地が、今や全国でも希少となったススキ草原であることやそこで「人と生き物が入り会う」茅場再生の取組みが進行中であることをご承知おきいただきたいもの。

このごろ嬉しかったこと；ガイドマップの出来上がりや大臣賞受賞もさることながら、もっと感動的な小さな出会いや出来事のあれこれ。まずは、萬枝さん達が一生懸命準備してくれた野焼きが、お天気次第にもかかわらず一発成功したこと。これで、4回やって2勝2敗！ 日を定めず、その日の空模様次第で“雪間を焼いた”昔を羨ましいとも思いつつ。

青木沢峠の昔を偲んで手描きの地図を用意してくれていた(林)勤一翁。降りしきる雨の中、武尊川を渡るための仮橋を懸命に架けてくれた亨さん、親男さん。

道普請に参加してくれた朝霞西高校ワングル部員7名の若者たち。地元や我々にとって、次世代を担う若人が参加してくれるほど嬉しいことはない。引率責任者の中村さんに大感謝。皆さん、また来てね！

地元・藤原案内人クラブから初のお声がかかりがあって、雨呼山遊歩道の道普請のお手伝いできたこと。これからも、雪堀や堰刈り・畦刈りなどお手伝いしたいもの。

まだある。5月から稲さんが幹事会に参加してくれることになった。元・「水源の神を語る会」の世話人仲間として心強いかぎり。ホームページの充実や「茅風通信」の場を通じた発信機能の拡充など、手薄な事務局の担い手として共に汗をかきたい。

こうして、老若男女、地元・行政と下流の市民団体、様々な職業や経験の持ち主が塾のフィールドに入り会い、活動に参加してくれる。それが、とりもなおさず現代版・入会の様相を形作っていくことになるのだろう。いつ完成するか分からない「地域丸ごと博物館」作りだけど、それに向かっての活動のプロセスが人と生き物が入り会う「コモンズ村ふじわら」の形成過程でもあるのだろう。

私事だが；この6月で43年にわたる勤め人稼業に終止符を打った。卒業記念に道東の旅にでた。およそ10年ぶりに旧知の友に再会、感動の連続だった。シマフクロウの森を再生しようとミズナラの幼樹を植えた西別川流域の一画が森になっていた。釧路湿原東岸の茅沼駅前の民宿「六花」は20年前の最初の訪問から3度目だったが、敷地を囲んでいた幼木たちが成長して小さな森になっていた。そして、50年かけて育成された別寒辺牛川上流のパイロットフォレストは河口の厚岸湾の蛸の森になっていた。継続することの力、そして10年、50年という歳月をかけて人知が自然に働きかけもたらした大きな変化の有様に心打たれる旅だった。